

軍医中尉とセストラ三名、我々三名が内科でした。

外科は男性のソ連軍医、看護婦は内科と同数でした。患者で全快した人が二名通訳、現地の娘さんが掃除、雑用係として二名、以上のメンバーで帰国までの一年間は本来の仕事なので苦にならず、軍医も個人的には大変優しく、我々看護婦を大変大切に扱ってくれました。

夜勤明けは自由で、何をしてもなく、風呂も週三回あり、これが一番うれしいことでした。

二十二年六月二十日、軍医大佐から帰国を知らされ、今度こそ本当に帰国できるんだ、本当だろうか。出発のとき女医が、娘がズボンではおかしいからと、自分の軍服のワンピースを私にだけくださった。大切に持って帰りました。幸いにも抑留生活の後半は恵まれていたように思います。

病院に別れを告げて、ナホトカに集結、婦長を初めとして、別れ別れになっていた友人と再会し、涙の対面もありました。六月二十五日「栄豊丸」に乗船し、いよいよシベリアとも別れを告げ、一路祖国を目指し

ました。

ただ感無量でした。二十八日、夢に見た日本内地の島影が見えたときの感激、皆が甲板に上がり歓声が上がりました。しっかりと東舞鶴の土を踏みしめました。検疫、MPの検査手続きを終えて、七月三日、米子市に復員することができました。

異国の浦島太郎

高知県 山本 弘

昭和二十年、私は満州延吉の憲兵隊本部にいた。

八月十二日、関東軍第三軍司令官閣下の身边護衛を、山口軍曹と私の二人がおおせつかった。

十五日、北鮮の羅津、清津がソ連軍の爆撃をうけているという情報をきいて、軍司令官と一緒に視察に行った途中、ドンドン敗走する将兵に出会った。また爆薬や被服庫が爆撃されて燃えている。とにかく全車輜を動員して被服を延吉へ運送せよと命令していると

きに、終戦の知らせがあった。そこですぐに引きあげて、延吉へ帰ってきたのは二時半ごろであった。

ところがソ連機が超低空でやってきて、私たちに機銃掃射をあびせかけた。「待避ッ」と將兵はみんな逃げたが、司令官は軍刀をついて微動だにしない。というのは死ぬつもりである。參謀は逃げたが、副官と護衛の二人は閣下の傍らをはなれるわけにはいかない。銃弾はブスブスと目の前へ突きささっていく。私と山口は身ぶるいしていた。敵は威嚇のつもりだったので、幸いに命に別状はなかった。

当時、兵隊は破甲爆雷を背負ってソ連戦車へ肉弾攻撃をしかけていたが、それは効果なくまったくの無駄死にであった。そこで司令官がとめるため、連絡將校を行かせた。一線では將校が真っ先に逃げ出し、下士官、兵が何百人となく無駄死にをした。

十六日の朝、不寝番で私たちは司令官を守っていた。午前二時すぎだったがガラガラと凄い音がする。官舎の裏へ廻ってみると、丘陵の向こうに道路があるが、そこにソ連の重戦車やカチューシャ（火器）が四キロ

地帯へズラリと並んでいる。この火器を見て、とうてい日本軍はかなわないと思った。

五時をまわって明るくなったので司令官をおこし、迎えの車を呼んだ。司令官は八時前に軍司令部へ行った。九時前、ソ連の軍使がジープに白旗をたててやってきた。無条件降伏をうけるかどうかの返答を求めてきた。もちろん応諾である。この日、武装解除をうけた。

ところが官舎が現地人や朝鮮人の掠奪をうけているという情報はいったので、血気さかんな將校たちは、日の丸の鉢巻きをし軍刀をもって二十人ぐらいがトラックに乗って出かけた。日參謀があわてて止めたが、きくものか、そのまま行つた。二時間ぐらいして、誰もかれもが返り血をあびて帰ってきた。

現地人や朝鮮人に対する差別がひどかったので、真っ先に官舎が襲われたのである。

やがて憲兵は家族と隔離され、取り調べがはじまつた。私たちの隊長、S大佐は青酸カリで服毒自殺した。私は十二月四日に一般兵隊のなかに入って延吉の駅

へ出た。駅で汽車を待つ間にソ連兵の掠奪がはじまり持ち物を何もかも奪われた。夕方貨車に三十名ぐらい詰めこまれた。私は髭をやし貨車の隅にどっかと腰をおろしていた。するとソ連兵が二名、掠奪にやってきた。一人が見張り、一人がマンドリンを突きつけて、吠へ強奪した品物を入れていく。私はいっていた新品の編上靴をとられた、予備の地下足袋はもっていたが、これは困ったことになったと思った。すると巡察の将校がやって来てパーンと拳銃をぶっ放すと、やつらはあわてて逃げたが、吠をもったままだったので私の靴は返ってこなかった。

汽車は北鮮へと南下していた。私たちは二十一年の六月まで古茂山にいたが、ここではカーバイトの社宅にはいり、これという作業もなかった。炊事の薪とりがおもな仕事で、将棋をさしたりして暇をもてあましていた。

やがてダモイ（帰国）というので南下して興南まで下った。ここに二か月位いたが、この間に脱走する者が多かった。その頃地方人がソ連人の家のペンキ塗り

などの内装の仕事をしていた。そこで知り合った人には実は私は憲兵だったと打ち明けると、そりゃ大変、シベリアへ連れてゆかれてとても帰ってはこれない。脱走せよとすすめられた。その晩テントで寝ていて、若い兵隊の顔を見ていると、班長の自分がこの子らを見捨てて逃げたいけないと思う反面、いやシベリアへ連れていかれたら殺されるかもしれん。無駄死にだけはしたくないとまた思い返し私物のシャツなどを風呂敷に包み、あくる日兵隊と一緒に使役に出た。

土手を越え道路の北側の高梁畑を突き切って、日本人の県人会の立札のある所へはいれと道順を教えられていた。よしと思って高梁畑へ入り用便をするかっこうで様子をうかがっていたが、そのうちこりゃいかん、おれは卑怯なことをやっておる、人間として軍人としてこんなことをすべきではないと思いとどまって帰っていった。

私もし脱走していたら、良心の呵責で一生悔やんだだろう、思いとどまってシベリアに行ったことは正しいと思った。苦勞はしたが自分自身は満足感を持っ

ている。

八月二十三日、汽車で興南の駅を出て北上する。途中兵隊が二十名逃亡して、ソ連の指揮官が怒った。そして今後見つけ次第に銃殺すると宣言した。ところがS軍曹が、わしは逃げるというので、それはいかんと私が止めた。兵隊を扇動するなど釘をさしておいた。そしたら四人で逃げた。線路の下のマンホールをぬけて駅前に出た。脱走というので非常点呼をうけたが、私の班で一人若い兵隊がいなかった。やがて、S軍曹はじめ四人がふんどしひとつの裸でつれてこられ、私たちの見ているところから三十メートル前の田圃に並べさせられ銃殺された。それも一斉ではなく一人一人である。そして将校がピストルでとどめをさした。そのまま田圃を掘ってそこに死体を埋めた。

ここから徒歩でソ連のクラスキノへはいったが、ここには何日もいず、ウラジオストックから百五十キロぐらいのソミノフカ收容所へはいった。九月ははじめのことで、ここは原始林の真っ只中とのことである。

なんにもない所なので、まず自分たちのはいる兵舎

を作らなければならぬ。白樺を切り丸太を組み、隙間には葉っぱを置き土をかぶせた。昼夜突貫でやってここに千名はいった。中の照明と暖房は松の立ち枯れをタイマツにしてそれでことをたした。

二十二年冬、私たちは栄養失調になったが松の実で命をつないだ。松の木を伐りたおして実をとり焚き火に松の実を放りこんで焼いて食べたが、落花生と同じ味でうまかった。この松の実がなかったら全員が死んでいたかもしれない。

当時の食事は、朝パン、昼サケの切り身のスープ、夜はスイトンで団子が五つ、といった具合で栄養失調でたおれた。夢遊病者のようによろよろしているし、頭はボーとなつて、冗談話をする気力もなくなつていた。

四月末がくると雪どけである。ノビル、アカザの野草が食べられる季節、六月になるとキノコを食べた。なかには毒タケを食べて死んだ者もあった。

真夏になってくると、蛇、トカゲ、ハリネズミがご馳走で、特に山ウサギ(蛇)のときは歓声をあげた。

こうした外での食べ物も九月頃までで、二十一年から二十三年までの二年間ここにおいて、ハバロフスクの収容所へ出ていった。

二十三年の春、ビタミンCの欠乏から野菜を作ることになった。キャベツ、トマト、キュウリの種をまいて温床で作った。野菜は最高に出来て、ソ連将校がハラシヨウと喜んでくれた。ところが、私が憲兵隊にいたことがそれとなくわかって、ソ連のゲーベウから呼びだされついで行くと、いきなりソ連将校が拳銃をつきつけ、なぜお前は身分をかくしていたかと言う。

私は単なる取り調べだけで諜報活動などは全然やっていないと突っぱねた。しかし結局、ハバロフスク周辺の戦犯ラーゲルをたらい回しにされた。作業は町の水道施設工事で穴掘りだったが、仕事は楽でノルマがあった。賃金もくれたので張り切ってやった。ところが作業がよい者、何百人かが選抜されて伐採作業に行くことになった。その出発の時にはなんと元帥がやってきて、「ハラシヨウ、ラボータ」といって励ましてくれた。しかし、ここでの伐採作業は辛かった。よい木

は一つもないのでノルマはあがらない。楽団入りで競争させられた。それこそ昼食をしながら働いた。ここがすみ次第「ダモイ、トウキョウ」といわれたが、せっかく貯めた金も使い果たし配給になった。半年ほどして二十三年末にハバロフスクに帰ったがなかなか日本へは帰してくれず、またあちこちを転々とまわった。

毎年、春はダモイの季節である。夕食を一緒に食べ、朝起きると相手はいない。みんな帰っていくのに私だけはとり残されている。そんな淋しい思いを何度もさせられた。

二十五年正月、戦犯で刑に服している者を除き、一般のひきあげでは最終的なダモイという組にはいつてナホトカへ、駅へおりと黒山の人、ここに一週間ばかりいて、またウオロシロフへ作業にやらされた。列車へ材木の積み降ろしの仕事と製材所の作業だった。

この頃、体が肉をとりたいと要求していた。ちょうどそうしたところへ、セパードみたいな大きな野犬が残飯あさりにやってくる。そこでワナをかけたら見事

にとれたので大歓声をあげた。それこそみんな舌づつみをうって食べたことである。

一か月ここにおいてナホトカへ帰ったら、たくさんいた人達が一人もいない。ガラソソとなっていた。

二月六日、いよいよ引き揚げということになりナホトカの港へ出た。私たちの宿舎から丘を越えると、埠頭に日の丸の旗をつけた高砂丸が見えた。白衣の看護婦さんも見える。もうその時は何ともいえなかった。

何時間も待って乗船したが、看護婦さんが「ご苦労様でした」とやさしく迎えてくれたときは思わず目頭が熱くなった。五年ぶりに畳を踏んだ。煙草のバットが二個、夕食は食器へまっ白いご飯が山盛り、みんな席へついても感無量でしばらく食べなかつた。夢にまで見た白いご飯が現実になつたので涙を流しながらかみしめた。あの時の味は今も忘れられない。夕方、出港のドラが鳴りイカリをあげた。いよいよシベリアとのお別れである。甲板へ出て別れを惜しんだ。

二月八日、舞鶴へ上陸、ここに一週間近くいて十六日、古里、一宮へ帰り着いた。宇野から連絡船に乗っ

て高松駅へ着いたら、私ののぼりが立って迎えに来てくれた。私は十年故国にいかなかったので浦島太郎みたいなものだった。なにしろ小学生だった甥が、女房、子供を連れていたのだ。

私はシベリア抑留のことを生ある限り忘れぬ。最近の日本の情勢は、軍備増強をいって戦争への道を進んでいる、そんなことを感じると言葉では言いつくせない敗戦の悲惨さを思い出す。いかなる時でも絶対に戦争はしてはいけぬ、とにかく話し合いで解決できないことはない、私は信念をもっている。

戦争によって私たちは言葉では言いつくせない苦労をしてきたので、このことをわが子にもしっかり言い伝えておかねばならない。

人間はなにが辛いかというと、それは自由を束縛されること、腹いっぱい物が食べられないことである。

このことは抑留者である私たちが身をもって体験した。それから抑留中に感じたソ連人のことだが、地方人も兵隊も実に明るく朗らかだということである。ソ連兵もはじめは「ダワイ、ダワイ」と私たちを仕事に駆

りたて、その奴隷的な仕打ちには腹が立ったが、そのうち慣れてくると、マホルカをくれるし、休めといっ
てくれるようになった。

またトラックへ地方人や兵隊と七、八人で一緒に
乗って行ったことがあるが途中、用便のため車をおり
ると、兵隊がマンドリンをひき、それに合わせてダン
スをやる。トラックに乗ったら歌をうたうというふう
に、いつ接しても明るく朗らかである。こういう明る
さは一体どこからくるのだろうかと考えた。

それはスラブ民族という民族性とともに、社会の仕
組みで生活が保障されているためだろう。人間本当の
生き方はこれだと思った。

現在はまた見方がちがってきているが、シベリアで
見たときは正直そんな風に感じたことであった。

脛の傷、抑留生活の思い出

熊本県 大仁田 幹 夫

ニーハラシヨール小隊

武装解除されたとはいえ反ソ反共の思想で教育をさ
れ、帰国の自途も立たず、希望も目的も失った者同士
の集団ですから、作業に専念できるはずもありません。
私自身もそうであったし、へつらいや要領を使わない
私達の小隊はソ連側からの評価も悪く、いつもノルマ
未完遂の状況でした。作業は主に伐採と鉄道建設に従
事しましたが、ニーハラシヨールボータの小隊として
きめつけられ、いつも転属対象にされ、随分あちこち
に回されました。ある時、鉄道沿線作業中でしたが、
三名を選んで小隊のためにとコルホーズの馬鈴薯と人
参を盗ませたことがあります。軍隊での訓練が物を
いってか、見事成功し、麻袋二袋一杯の成果があった
わけですが、線路下で分配中一般人に見付かり、ソ連